俳句

大津俳句会

釘撒きしごとくに子等の大昼寝　井芹眞一郎

女王花近寄りがたき白さかな　秋山　恵子

梅雨ごもり心しづかに写経かな　市原　初女

師の御句遺墨となりし渋団扇　江藤　みち

皿に盛る手の切れそうな水羊羹　大塚喜久子

静かさや植田の写す宮の杜　坂本　セキ

音もなく部屋吹き抜ける植田風　佐賀　久子

遠雷に線状降水帯荒ぶ　松尾　昭雅

声かけて育ちしトマト熟れにけり　岡崎　浩子

梅雨晴や影踏む幸のここにあり　森山美穂子

俳句

つのはな句会

夕凪はいつもニッキのにおい　曾祖父もいて　星永　文夫

かたつむり世論調査に角を出す　矢嶋　道子

田を鋤けば蛙鳴き出す瑞穂の国　水野　春子

玉虫の行く先明日の戸が開く　梅木トキエ

鬼百合の鬼になる夜の雨　ひとり　塚本　洋子

語り部が螢袋に灯をともす　榮田しのぶ

崩落の岸に桑の実　供物とす　志賀　孝子

カンナ燃ゆ　昭和断捨離は出来ぬ　田上　公代

曝書して父の頑固を懐かしむ　木葉　杏子

鬼太郎の下駄ころがって梅雨あける　上杉　波

短歌

大津短歌会

雨あがり朝日昇るも鞍岳は
姿見せじ雲の中　鞍　岳志

三リットルのペットウイスキー入れ替ゆる
山崎・響・オールドパーに　渡邊佐代子

大阿蘇の稜線静もる晩秋の
南郷谷に白百合は果つ　吉永　恵子

野焼きされ黒一色の草十里
世の自粛にて人疎らなり　豊岡ミツル

菖蒲湯に賑わい日の来し方を
捲るページは脳裏にありて　管野　静

おののきは我のみでなく蛇もまた
チロチロに赤き舌震わす　坂本　杲子

水張田は回りの景色逆様に
高きも低きもおしなべ写し　小平　善行